旧海軍施設の保存運動に携わって

桧垣七郎
（会員・佐伯市下久部）

私が初めて佐伯海軍航空隊兵舎を歴史的遺産として後世に残したいと思ったのは、平成元年の夏である。

仕事の関係で、兵舎の近くを調査する用件があり、その時に見た兵舎のたたずまいは、私の心を強く衝き動かすものがあった。

頑丈な鉄筋コンクリート二階建てで、灰色じみてうす緑にくすんだ外壁には△印や○印が白く描かれ、窓ガラスは殆ど割れて無くなっていたが、その殺伐とした姿には、旧軍隊の峻烈非情な精神や権力を象徴するように、人を威圧する暗く重苦しい厳しさを思わせるものがあった。

そこからは、愛する者達から引き離されて、命を賭けて戦うための訓練に明け暮れ、そして過酷な戦場へと飛び立って行った兵士達の、平和な「娑婆」（軍隊用語では一般市民社会のこと）を恋うる魂の声なき叫びが悲しく聞こえてきたのである。

そして、その多くは生きて再び還っては来なかったであろう。まさに、

夏草や　つわものどもが夢の跡

である。

また、その近くには、山腹を繰り抜いた防空壕・弾薬庫・燃料庫、それに飛行場跡には飛行機を隠した掩体壕等々、戦争中の施設が数多く残っていた。

軍隊生活の経験がある私には、その兵士達の心情がいささかなりとも理解できる。だから戦争の悲惨さ、虚しさを後世に語り継ぐため、これらの施設を是非とも残すべきだと思い、同志を募って行政に働きかけようとしたが、力及ばず、無念の思いに沈んでいた。

丁度その時、市の青年会議所の若い人達が、平成三年五月に「県南歴史資産開発推進市民会議」（略称「歴進会」）を組織して、保存運動を始めるために立ち上がったのである。そして、私も及ばずながらその一員に加えてもらっ

た。以後、十回にわたる会合を重ねて発会準備を進めてきたが、若い人達の精力的な行動力には頭の下がる思いである。

平成三年十一月二十二日。「県南歴史資産開発推進市民会議」の発会記念事業として「平和記念展」及び「シンポジウム」等のイベントを「世界史の中の佐伯」と位置付けて、二十四日までの三日間にわたって開催し、「発会記念誌」も発行するに至った。

昭和十六年十一月十八日は、佐伯湾に集結していた連合艦隊機動部隊が真珠湾を攻撃すべく単冠湾（ひとかっぷわん）に向けて出港した日である。因みに「歴進会」が産声を上げたのが奇しくも真珠湾攻撃五十周年、そして佐伯市制施行五十周年と二つの記念すべき日に重なったわけである。

当日、講師として元海軍参謀鳥巣建之助氏、山本司令長官の長男山本義正氏、元艦爆隊分隊長牧野恭三氏の三氏を招いてシンポジウムを開催し、聴衆との質疑応答もあり、その際、山本氏に対し聴衆の一人から

「山本司令長官が戦死されたのは、楠正成の湊川の討死の心境ではなかったのか」

という質問があった。これに対し山本氏は

「それは違う。父はそんな考え方をする人ではなく、日本の国を思ってどこまでも生き抜き、起死回生を図る決意であったが、はからずも敵によって暗号が解読されていたため、敵機に待ち伏せされて戦死したものである」

と答えた。印象深い答えだった。

聴衆も、旧軍隊経験者をはじめ若い人や女性、特に若い女性も交じって三百人を越す人達が会場を埋めつくし、行事に反発するような戦争アレルギーは見られず、むしろ感銘深く聞いていたようであった。

また、「平和記念展」への出品も多く、山本司令長官の遺品や揮毫をはじめ、動乱の時代を真摯に生きた兵士達の軍装類・写真・手紙・旗や遺品等が、参観者に深い感銘を与えていた。そうした中で、特に見る人の心を動かさずにおかなかったのは、わずか十七歳で特攻隊員として、昭和二十年四月、沖縄方面で戦死した、市内上久部出身の伊東宣夫二飛曹（戦死後少尉）の遺書であった。その文面を謹んで紹介しよう。

遺　書

十有七春秋逝くものは将又何。幼児濃藍の空に浮かぶ三日月を眺め何を願いしや。悠久三千年皇国の歴史は今日何をか語る。噫々時遂に来る。粉骨以って皇国に報ゆる時は来れり。既に右田戦死し真島又沖縄に散る。われら貴様等の後をしたいて今日特攻の一員に加わる事を得。喜ぶべし。武人の本懐これに過ぐるものなし。夫れ報恩の道今日をおきて又何れの日にか求めむ。

三千とせの歴史守りて捨つる身を思えば軽きわが命かな

いざ勇み我は出で征く琉球の空に散りにし友をしたいて

寸骨を埋むる　青山を待たんや。吾身北邙山頭（ほくぼうざんとう）一片の煙とならむとも英霊とこしえに祖国を守らん。皇天皇土願わくば吾が機を守らしめ給え。古より曰く一念石に立つ矢の験ありと。何ぞ一撃沈まざる敵艦やある。快なる哉壮なる哉この一撃。桜花の下いざ若桜勇躍征かん。天皇陛下万歳。帝国海軍万歳。最後に皇恩の万分の一にも報ゆる事の出来ざるを詫び又吾人をして今日まであらしめ給いし御両親、教官、教員、恩師に対して衷心より感謝申し上ぐ次第なり。

百里空特攻隊　海軍二等飛曹

伊　東　宣　夫遺

遺書の前には二飛曹の階級章を誇らしげに示して、昂然と微笑む飛行服姿の凜々しい美少年の遺影が置かれていた。

文藻豊かな美文調の遺書から、十七歳の純真無垢の少年に人間の赤裸々な本音も書くことを許さなかった時代の空気が一入悲しみを誘い、見る者をして粛然とさせるものがあった。

爆装した愛機に搭乗し、いよいよ基地を発進する時の心境は如何ばかりであったろうか。昭和二十年四月といえば、彼はまだ現在の高三になったばかりの年である。

幼い時からの彼を知る私は、遠い少年の日の一コマ一コマが思い出されて、遺書の前で不覚にも涙が流れるのをどうすることもできなかった。

彼は中学校時代（旧制）作家志望だったとのことで、ノートに短編小説らしいものを幾つも書き遺している。この春秋に富む覇気に満ちた少年を時代の波は予科練へと、そして特攻隊へと駆り立てていったのである。いま

わしくも暗い悲劇の時代であった。現在の日本の平和と繁栄も、これらの戦士達が血で購ったかけがえのない尊いものであることを改めて思い知らされたのである。

「歴進会」会員の中には旧海軍軍人も多いが、この人達は旧軍隊の非人間性、戦争の悲惨さ、空しさを自身でつぶさに体験した者として、また、歴史の生きた証人として、後世に平和の尊さを語り継ぐ義務があると思う。

現在数多く残る旧海軍施設は、国有財産として財務局が管理しており、佐伯市としても国から払い下げを受けて、「平和資料館」を核とする「平和公園」造成の計画もあるようだが、国との交渉がはかどらないのが現状である。

「歴進会」としても、こうした行政に働きかけ、後押しをして、戦争の空しさ、そして平和の尊さを語り継ぐべく歴史的遺産を後世に残すことが本務である。

このような地方都市での運動が基点の一つとなって、国民が人間として生長成熟し、戦争を解決の手段としない、そして戦争のない世界が築かれることを心から願うものである。

訂　正

「佐伯史談」第一五九号(平成四年二月発行)
「六郷満山峰入行」同行体験バスツァーに参加して
中の

P三一下段　峰行に少年少女を中にて　を
　　峰行に少年少女を中にして　に
　　たたずめる傘寿の女花菜畑　を
　　たたずめる傘寿の女菜の花畑　に

P三四上段　巡礼の一寺残して宇佐の宮　石を
　　巡礼の一寺残して宇佐の宮　筆者　に
　　神かけて祈る恋なし宇佐の春　を
　　神かけて祈る恋なし宇佐の春　石に

それぞれ訂正する。